

号したが、師の十返舎一九の歿後、二世一九と称した。本名糸井鳳助また鳳作と伝えられる。江戸大伝馬町に住んだ。嘉永2年頃東北を旅行して「奥羽一覽道中膝栗毛」を著わした。

資料 先祖の話（柳田国男）

日本の祭（柳田国男）

歳時習俗語彙（柳田国男）

仙台の七夕祭と盆祭（三原良吉）

仙台市史第6巻

仙台の年中行事（仙台観光協会）

仙台昔語電狸翁夜話（伊藤清次郎）

わしが国さ第24、36号（仙台協賛会）

本食い蟲五拾年（常盤雄五郎）

仙台年中行事大意（二世十返舎一九。「本食い蟲五拾年」、⁽¹⁾「年中行事絵巻解説」の内）

17. 工兵隊が架橋した旧仲ノ瀬橋

問 仲ノ瀬橋は、工兵隊によってはじめて本格的な橋となったのだと聞きましたが、それはいつ、どのようにして架けられましたか。

答 広瀬川のこの地点は、川の真中に瀬が露出しており、流れが二分されていました。仲ノ瀬という名はこれから起りました。今は大工町側は干上って、川原が川幅の半分以上を占め、しかも近年護岸盛土されて河川敷公園となり、流れは左岸沿いの一本だけとなっています。仙台開府時より約6、70年後に始めて架橋されたもののようで、川内大工町に通ずるので大工橋といい「延宝6～8〔1678～1680〕年間製作仙台北城下大絵図」に支倉橋・評定所橋とともに初見されます。やがて、元禄7年〔1694〕10月3日、大工橋を中瀬橋と改めた記録があります。中瀬橋は、中ノ瀬を中継地として、⁽¹⁾両側に架けた長短2橋から成っていました。左岸寄りの長い方は、長35間幅2間で、その内17間は板敷橋で橋脚は1丈5、6尺の石積となっており、⁽²⁾残りの部分は18間の土橋で、板敷橋と土橋とを継ぎ合わせたものでした。右岸寄り短い方は、長15間幅2間の土橋でした。明治時代に土橋の部分は全部木橋に改修されました。

昭和3年〔1928〕4月15日から6月8日まで、仙台商工会議所主催で、東北産業博覧会が仙台で開催されました。その設営工事が、その前年から着手されましたが、第1会場（川内の旧制二中の

新校舎)と第2会場(西公園)との連絡路をどうすべきかが、最大の難問となりました。両会場の距離は、広瀬川をへだてて、500 mそこそこでしたが、在来の仲ノ瀬橋は狭隘で老朽甚しい私設木橋で、博覧会用の順路として使用するには不適で安全性が懸念される状態だったのです。このままでは、大橋または澁橋を迂回することは避けられず、両会場は分断され、博覧会としては致命的な欠陥となるし、またその閉会后、新校舎へ移転する旧制中学生の通学上の問題とあわせて、対策がいろいろと検討されました。その一つとして、定禅寺通から直通の(現市民会館の所から川内までの)新規架橋案も出ましたが、兩岸の高低差が甚しいため、経費的にも(市の見積りによれば17万円)、技術的にも見通しを得ることはできませんでした。そこで最後の方策として、仲ノ瀬私橋の架替え以外にないと、軍に協力方を要請したものであります。これを受けた第二師団は、仲ノ瀬架橋が、川内所在部隊の利益につながることを考慮し、地元市民、商工会議所等の熱望を容れて快諾し、架橋工事の設計施工を軍が担当することになったのです。材料その他の所要実費6万5千円は、県・市・商工会議所及び地元受益者が分担しました。工事は、昭和2年9月11日から、川内の工兵第二大隊が作業に当り、総員400名を動員して、普通数ヶ月を要する延長172 m、幅6 mの堅牢な木橋を僅か20日間で完成しました。9月30日のことです。引継を受けた仙台市では、11月11日、西公園下仲ノ町通⁽³⁾に式場を設けて開通式を挙行し、小林八郎右衛門一家によって渡り初めを行いました。

翌年、計画通り開催された博覧会が、予期以上の成果を収めたのは、この架橋の賜物であり、川内の軍・民にとっての便益はもとより、旧制中学生の通学路としても、その後永く恩恵を受けることになりました。昭和10年には、コンクリート橋脚木橋に改造されました。なお、現在の仲ノ瀬橋は、昭和31年3月、8千780万円の工費で架け替えられたもので、長162 m、幅9 m、耐荷重量20 tの永久橋であります。

注(1) 「肯山公治家記録」後編卷之70、元禄7年〔1694〕10月30日条に『……大工橋ヲ中瀬橋ト名附ケラル』とある。

注(2) 左岸の川岸に材木置場があり、対岸の大工町と関連があった。

昔、飛驒の木匠〔たくみ〕がここまでくると大水で橋が落ちて渡れなかったので、彼は一晩で橋を架けて渡ったというので、この橋を一夜橋と呼ぶ伝説がある。

注(3) 「橋」(河北新報クリッピング、昭和40)に『仲ノ瀬橋は、昭和3年の博覧会に工兵の手で1週間^{×××}でかけられた列柱橋である。……』とあるのは誤

資料 東北産業博覧会誌(仙台商工会議所)

仲ノ瀬橋架橋工事写真帖(石川写真館)

仙台二中移転秘史(河合絹吉)